文化

新なら民俗通信

10　増澤　文武

松本楢重と高校の修学旅行

▼松本楢重先生

大和文華館の『富岡鉄斎と近代の日本画』展で、久しぶりに奈良民俗文化研究所の鹿谷さんにお会いした。話の成り行きから、本題名での原稿を依頼された。

その後、驚いたことに猪股静彌著『野に遊び人に学ぶ』（奈良新聞社刊）の抜粋を頂き、アララギ派の歌人・島木赤彦が、郡山中学の学生であった松本楢重（以後、松本先生と記す）に寄せたとされる和歌について書かれていた。

楢重は　いかにしたるか
そらにみつ　大和の空に
物音もなし

赤彦の名前は、郷土・長野県諏訪盆地の歌人として小学校時代から聞かされて育ち、母校・諏訪清陵高等学校の旧制中学以前の時代の大先輩にあたる。

▼出発前に始まる修学旅行

高校の修学旅行は大阪経由の奈良・京都だったが、まず思い出すのは、夕暮れの薄暗い教室で身振り手振りで白墨を持ちながら懸命に、実に情熱的に奈良について語る松本先生の姿である。

今回、同窓生の何人かに修学旅行についての印象を聞いたところ、後に新田次郎著『霧の子孫たち』のモデルとされた先生が、「本校を気に入り修学旅行のためにわざわざ奈良から来られ、課外授業と奈良をご案内して下さる。それに十分に答えられる行動をとるように」と松本先生を紹介されたとのことであった。私自身も、担任の先生から力を込めて同様に紹介された。修学旅行は、その時点から始まっていた。

▼法隆寺から西ノ京へ

さて、実際の修学旅行は昭和33（1958）年、2年生の春、約200人ほどだったが、奈良交通の観光バス数台で、大阪を発ち朝9時頃に法隆寺に到着。松本先生が迎えて下さり、改めてバスガイドの方々を〝選りすぐりのメンバー〟と云って紹介され、法隆寺の説明の後、拝観のため3時間の自由行動が与えられた。当時では考えられない、長時間にわたる現地での自主行動であった。

その後、西ノ京に行き、薬師寺・唐招提寺を拝観した。メンバーの一人は、薬師寺の僧侶の見事な話術の説明に感銘を受け、写経を始め、しばしば薬師寺を訪れているとのことであった。

私自身、最も印象に残ったのは唐招提寺で、詰め襟の高校生を鑑真和上の御廟や戒壇をも案内され、「君たちなら分かるはずだ」と言い放たれたことである。

当時は整備されておらず、御廟は古い池の中程に宝篋（ほうきょう）印塔のみが建ち、戒壇は三段の石段上の、だだっ広い平面の状態であった。これらを含む唐招提寺の佇まいは、その後もずーっと心に残っている。

▼東大寺の拝観

東大寺の拝観も異質であった。南大門・三月堂・二月堂、そして戒壇院を廻ったが、大仏殿は拝観しなかった。理由は「将来いつでも大仏さんは拝観出来る。この修学旅行の、時間のない時に拝観しなくても良い」ということであった。戦後あの時代、まだ人々は生活に追われ、交通も十分でなかったことを考えると、遥か遠い山中の私らが、果たして奈良を再度訪れるだろうか？　そういう疑問が頭をよぎった。

戒壇院（戒壇堂）については、「建物は江戸時代のもの」と説明された上で、「四天王立像の美しさの中にこれだけの力強さを秘めたものはない。よーく見なさい」と云いつつ、「この素晴らしさが分かるだろうか？　さらには将来、君たちにこの美しさ・力強さが分かるようになるだろうか？」という余韻を残した説明だったように思う。

情熱的に奈良を語る

▼平城京でおむすび

平城宮跡のほとんどが田畑の時代に、現在の大極殿の東側だったと思うが、旅館で貰ったおむすび2個と2、3切れの奈良漬けの昼食を取った。その場にあっても、この奈良盆地のこの地にほぼ東西南北一里四方（正確にはさらに東に東西1・6キロメートル、南北2・1キロメートルの外京を含む）にあった

青丹よし　寧楽の都は
咲く花の　薫ふがごとく
今盛りなり

の都を想像しながら食するように、とのことであった。部分的にイメージしても、あの田畑の中で都全体を想い描くことは、残念ながらとても私には出来なかった。

その後、京都に移り、竜安寺や金閣寺など拝観したが多くを覚えていない。従前通りの修学旅行のパターンであった。

後に母校の校長になった6年後輩は、松本先生の案内中に質問攻めで予定のコースを廻りきれずに、興福寺国宝館を拝観出来ないまま夕方、旅館にたどり着いた。その際、何と松本先生が交渉して下さり、夜間に国宝館を拝観出来たという。

前述のように、何人かに修学旅行の印象を聴いたとき、メンバーの中には松本楢重の名前が語られ、また名前を聞いて即反応を示した。関西の大学に進学し、また関西に住んでいる動機や遠因に、私を含んであの修学旅行が影響しているように思われた。

▼集中的誘致

松本先生は、早稲田大学卒業後、朝日新聞社に入社、奈良支局長を経て昭和22（1947）年、奈良県民生部観光課嘱託となり、同28（1953）年、奈良交通株式会社顧問としてバスガイドの研修・テキスト作成に当たられた。

奈良県は観光立県として修学旅行に焦点を当て、当時民生部長であった長野県出身の小林重幸氏と共に、小林氏の出身地の長野県と関東の港湾都市・横浜を含む神奈川県に集中的に誘致を図り、学生が大人になった時再び奈良を訪れることを期待したと聴く。「大仏さんは将来いつでも参拝できる」とされた松本先生方の思惑は、多く達し得たのではないかと思われる。

最後に島木赤彦の和歌については、最初赤彦が少年の楢重を気遣い、赤彦「き後は楢重が赤彦の地の私たち少年にエールを贈って下さったのだろうか？　と、ふと心をよぎった。

（ますざわ・ふみたけ＝公益財団法人・元興寺文化財研究所名誉研究員）

修学旅行時の松本楢重先生（右）＝竹中由幸氏撮影

松本楢重先生の編著書の一部（左は『正倉院雑談』（昭和23年刊）。右は『奈良の本』（昭和27年刊）